



たみ
ダムと民の五十年抗争
紀ノ川源流村取材記

浅野詠子著、風媒社、2017年8月、
1800円+税

奈良県川上村は「吉野杉」に代表される林業の村である。かつて「東の八ッ場、西の大滝」と呼ばれた同村の大滝ダム建設をめぐる抗争の一部始終と、ダムが周辺地域に及ぼした水質悪化などの影響を、かつて新人記者としてこの地域を担当した元奈良新聞記者がルポしたものである。民主党政権の「脱ダム宣言」がとん挫しダム問題は人々の関心から遠ざかったが、本書からは、原発建設などと本質的に共通する、莫大な建設投資と地元巨額な補償金や補助金が流れる構造が読み取れる。その結果、互いに支えあった住民同士

の共同体的関係が分断され、昔は無かった「お金に執着する空気」が生まれ、住民は都市に移住し、過疎が著しく進んだという事実が残った。

奈良盆地に農業用水を供給する吉野川分水事業に伴い建設された大迫ダム（1973年完成）に続き、62年11月、その下流に大滝ダムの建設計画が決まった。伊勢湾台風（59年9月）級の洪水を防ぐのが目的だが、3640億円の巨費を投じて完成したのは半世紀後の2013年だった。村役場のある集落をダム湖に沈める計画に反対運動が起き、村民や研究者は地滑り発生の危険性を

指摘した。建設省（現国土交通省）はそれを無視して工事を進めたが、ダム本体の完成（02年）後の試験貯水により湖畔の白屋集落の地盤に亀裂が走った。集落の住民は3年間仮設住宅暮らしを強いられ、住戸移転と地滑り対策工事でさらに10年を要した。

著者は、情報公開制度を使って官庁の資料を集め、住民や元住民だけでなく建設推進側の官庁職員にも取材しその葛藤を伝え、丹念に事実を積み重ねた。「官製の記録しか残らないでよいものか」という問題意識に基づいた著作である。

編集委員 神野 武美